

東京言語研究所 公開講座

# 世界で語り継がれる昔話 ～口承文芸学と言語学の立場より～

世界の国々の中で多くの民族に語り継がれる物語があり、それが今でも色々な形の昔話として、各地に受け継がれている。昔話は同じ原型を持つお話でも、その土地の文化や風習に合わせて変容する。それぞれの物語がどこで発祥したかという問題も興味深い、それらが各地域でどのように具体的に語られているかも興味深い。今回は、小澤氏には長い年月をかけて昔話がどういった語り口を獲得してきたか、池上氏にはその構造について言語学の立場からご講演いただく。

<講師> 小澤俊夫氏 (筑波大学名誉教授 / 口承文芸学、ドイツ文学)

池上嘉彦氏 (東京大学名誉教授 / 言語学)

<日時> 2017年5月4日(木)

14:00～17:00

定員  
50名

<会場> 東京言語研究所

(新宿区西新宿 6-24-1 西新宿三井ビル 13階  
ラボ教育センター内)

<参加費> 一般 2,000円 学生 1,500円

\*2017年度理論言語学講座受講生は 1000円

※参加費は当日現金でお支払下さい。

<申込み> 「ホームページ申込みフォーム」、もしくは「FAX(HPよりダウンロード)」でお申し込みください。①公開講座受講希望 ②氏名 ③フリガナ ④性別 ⑤住所 ⑥電話番号 ⑦Eメール アドレス⑧区分 (2017年度理論言語学講座受講生・一般・学生) ⑨所属 (大学生・大学院生・教員・会社員・その他) (上記情報は東京言語研究所事業以外には一切使用いたしません。)

**問合せ先**

公益財団法人 ラボ国際交流センター 東京言語研究所

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-24-1 西新宿三井ビル16階

TEL:03-5324-3420 FAX:03-5324-3427

ホームページ:<http://www.tokyo-gengo.gr.jp/>

プログラム(予定)

14:00～ 小澤俊夫氏 講演

15:30～ 池上嘉彦氏 講演

16:30～17:00

小澤、池上両氏対談および 質疑応答

講演要旨  
は裏面へ

## 【講義要旨】

小澤 俊夫氏 講演タイトル：「昔話の語り口」

昔話は口伝えされてきた文芸である。逆に言えばそれは「耳で聞かれてきた文芸」である。耳で聞かれるためには、その文体は簡単明瞭でなければわからない。従って昔話は長い年月の間に、どの民族においてもおしなべて、簡単明瞭な語り口を獲得してきた。そこには「昔話の文法」がある。この文法の理解が昔話理解の第一歩なので、この講演では日本の昔話をひとつ語って、具体的に文法の説明をする。

### 講師略歴

口承文芸学者。筑波大学名誉教授。元・国際口承文芸学会副会長。元・日本口承文芸学会会長。1930年、中国長春生まれ。グリム童話の研究から出発し、マックス・リュティの口承文芸理論を日本に紹介。その後、日本の昔話の分析的研究を行ない、昔話全般の研究をすすめている。1992年より全国各地で〈昔ばなし大学〉を開講。1998年に独自の昔話研究と実践、若手研究者の育成を目的として、〈小澤昔ばなし研究所〉を設立した。1999年に季刊誌「子どもと昔話」を刊行し、昔話の研究と語りの現場を結びつけることに努めている。現在、全国1,120の昔話を、〈昔話の文法〉に則した体裁に整え、本にまとめる作業に取りくんでいる。著書に小澤俊夫の昔話講座―入門編『こんにちは、昔話です』、『ろばの子―昔話からのメッセージ』、『昔話の語法』、『昔話のコスモロジー』など。

池上 嘉彦氏 講演タイトル：言語学からのアプローチの接点の一つ

かつて—20世紀のなかば、〈構造言語学〉が盛んだった頃—言語学は自然科学における基礎科目として数学が占めるのに相当する地位を、人文学において占めるものという言説がなされたことがあった。言語学が言語という対象について、その構造の仕組みをもつばら形式として捉えようとする志向性を有するということを踏まえての発言で、これはその後〈文化は言語〉であるという文化記号論のテーゼにも連なる。

そのような方向での試みで、実際に一応確かな成果があったといえるのは〈口承文芸〉（昔話、子守唄、なぞなぞ、など）といったものの構造分析においてであろう。小澤先生のお話の補足として民話レベルで日本も含め、世界中に分布する〈シンデレラ〉系統の話を中心にとりあげてみたい。

### 講師略歴

東京大学名誉教授、日本認知言語学会名誉会長  
東京大学で英語英文学(B.A., M.A.)、Yale 大学大学院で言語学(M.Phil., Ph.D.)を専攻。インディアナ大学、ミュンヘン大学、ベルリン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、などで客員教授。著書：『英詩の文法』、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』、『ことばの詩学』、『詩学と文化記号論』、『記号論への招待』、『〈英文法〉を考える』、『日本語と日本語論』、『自然と文化の記号論』、『ふしぎなことばことばのふしぎ』、『ことばの詩学』など。